

ありえざる 都 上 市

デイヴィッド・ジンデル／関口幸男〔訳〕



NEVERNESS ありえざる都市 Ⅳ

デイヴィッド・ジンデル

関口幸男訳

海外SFノベルズ
江苏工业学院图书馆

藏书章

早川書房

NEVERNESS

by David Zindell

Copyright © 1988

by David Zindell

First published 1990 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

John Schaffner Literary Agency

through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

検 印

廃 止

ありえざる都市〔上〕

1990年11月20日 初版印刷

1990年11月30日 初版発行

著 者 デイヴィッド・ジンデル

訳 者 せき ぐち ゆき お 関 口 幸 男

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(252)3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-202069-5 C0397

Printed and bound in Japan

ありえざる都市

〔上〕

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1990 Hayakawa Publishing, Inc.

メ
ロ
デ
ィ
に
|

目次

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
洞窟の翁	アクリア	賢人ユリ	クウェイトケル	レイナーの彫刻	人間のイメージ	ソリッド・ステート・エンティティ	数の嵐	時間守護者の塔	パイロットの宣誓	旅人は死す
225	209	191	176	151	122		73	56	31	7
						92				

16 15 14 13 12

小さな死 240
飢え 256
無線機 274
予見師の目 291
あるパイロットの死

319

1 旅人は死す

旧地球上で古代人たちは、しばしば、生命の起源はどこにあるのかという思いに駆られ、数々の神秘を説明するのにとくさんの神話をつくった。母なる女神、ムームがいたが、彼女は、一匹の大蛇を呑み、大蛇は、彼女の腹の中で増殖し、その九十億匹の子供が彼女の腹を食い破って日の光のもとにあらわれ、そうして陸の動物となり、海の魚となった。父なる神、ヤーウェがいた。かれは、六日間で天地を創造し、五日めと六日めに鳥たちとけものたちを呼び寄せた。豊穡の女神、ランダム・ミューテーションと名づけられた偶然の女神がいた。などなど。真相は、銀河系全体のいたるところに、イエルドラ人として知られる一族が生命の種を蒔いたということだ。もちろん、イエルドラ人の起源は知られておらず、おそらく知ることはできないのであろう。究極の神秘のままだ。

—— 神秘的な数学者と言語を絶する炎の探求者の
「社会」における時間守護者にして測時者
長官 ^{ローレンス} ホーテイー・ホストロー著『ホモ・サ
ピエンスのためのレクイエム』より

無窮の希望はあるが、人類のためのものではない。

—— 大量殺戮の世紀の創作家 フランツ・カフカ

人類——生き残ったひと握りの人類——が、古エッダとして知られる謎を追究していた、いまだ海辺で小石や貝殻で遊ぶ子供のようであったころ、われわれが探究する叡知と不滅への代価は、われわれに可能ないかなる手段を講じても支払うことができないとわかるずっと以前に、ぼくは星々の呼び声を聞いて、生まれ育ち死を迎えるはずの都市を去ることにした。

ぼくは、この都市のことを「虚無」^{ニヒル}と呼ぶ。一度、時間守護者から聞いたことだが、位相空間^{トポロジー}を貫通している道筋が紐の堅いこぶのようにもつれ、閉道^{クローズド}となつているところにある近隣の空間を発見したわれわれの「社会」の創設者たちは、近くの「氷瀑」^{アイス・フォール}という名の惑星にわれわれの都市を建設することに決めたのだ。かつては、そうした空間のこぶはごくまれにしか、あるいはまったく存在していな

いと信じられていたので——集合論者たちは現在、これらのこぶを濃密空間と称しているが——われわれの初代時間守護者は、宇宙が内側へ崩壊しないかぎり銀河系を降下することはできても、より密度の高い濃密空間を発見することはできないと宣言した。われわれの冷たく、黄色い星のまわりに幾十億の道筋があるのか、だれひとり知る者はない。たぶん、無数の道筋があるはずだ。自分たちの定理が無限の濃密空間の存在しえないことを証明するものと信じていた大昔の集合論者たちは、われわれのバイロットたちが、求める位相空間論的関連を発見することはないと言した。といったわけで、われわれの初代バイロット長官は、位相空間を脱し、われわれの愛すべき、いずれは滅びる運命にある都市を建設することとなった小さく冷たい山岳地帯の多い島の上に出たとき、否定的だった学者たちへの皮肉をこめてこれを「虚無」と名づけたのだ。むしろ集合論者たちは、今日にいたるまで「ありえざる都市」と呼んでいるが、注意を払う者はほとんどいない。ここに、われわれの「社会」の黄金時代と、たびかさなる大きな危機の歴史を述べる責務を負っているべく、マロリー・リングスは、先輩バイロットたちの伝統にしたがうつもりだ。「虚無」——ぼくは、まだほんのちよっぴり昔、修練期間に入った子供のころにこの経緯を知った。ぼくは、いま、

これを「虚無」と呼ぶし、これからも「虚無」のままでありつづけるはずだ。

「虚無」の紀元二九二九年の「疑似冬」、第十四日に、ぼくの叔父であり、われわれの「社会」のバイロット長官であるレオポルド・ソリは、二十五年間の航宙——ぼくがこれまで生きてきた歲月よりも四年長い——から「都市」にもどってきた。大勢のバイロットと、そのなかにいたぼくの母、そして叔母のジャスティンは、てっきりかれが死んだものと思っていた。位相空間の漆黒のベールに呑み込まれてしまったか、ウィルドの、爆発する星々に灼き焦がされてしまったかして。だが、かれ、著名なバイロット長官は、みな予想を完全に裏切ったのだった。八十日間、「都市」は、この話でもちぎりだった。「疑似冬」がきびしくなり、真綿のような雪がはげしく降るようになったころ、ぼくは、アカデミーの構内ではむしろのこと、ファースターズ・クォーターのカフェやバー、いたるところで近く探究のための遠征が行なわれるという噂がささやかれているのを聞いた。探究のための遠征！ 当時、修練士修了者バイロットだったわれわれにとって——数日後にバイロットの宣誓をすることになっていた——それは胸のときめくことであり、と同時にそれにもまして、期待に落着きを失い、つらい思いにさいなまれることでもあった。われ

われの心中深くには、夢のような、だが、不可能事をなしとげるべく呼集がかかる、それもまもなく、という思いと不安が渦巻いていた。以下は、その不可能事の記録、夢と不安と苦痛の物語だ。

その日のたそがれどき、集会の前に、でっぶり太ったなまぐらな友人のバルドとぼくは、翌日の、長ったらしくて退屈な式の前にわれわれ——いや、ぼく——がパイロット長官に会えるような計画を練った。〈疑似冬〉の第九十四日のことだった。われわれの寄宿舎の表では、最近降った柔らかな雪がパイロット養成学校の敷地をうっすらとおおっていた。白く冷たい粉のベールを広げたようだ。ぼくは、霜のたつた窓ごしに、沈む夕日にきらめくリーサの高い塔群と、そのほかのカレッジを見やった。

「きみはなぜ、してはいけないことばかりしたがるんだ？」バルドは、大きな茶色の目で恨めしげにぼくを見つめながらきいた。ぼくは、しょっちゅうかれの複雑な性格とずる賢さが、突きだした大きな額と深く落ちこんだきれいな目とに凝縮されていると思ったものだ。だが、目をのぞけば、かれは醜男だった。黒く剛いあご髭を生やしており、赤いだんごっ鼻をしている。はでなシルクのローブが、山のように盛りあがっている胸、腹、脚へとたれさがっており、窓べに引き寄せてすわっている大きな、詰め物をした

椅子の上で鍛くちゃになっていた。ふっくらした両手の指全部にそれぞれ色違いの宝石の指輪をしている。バルドは、もととはといえば惑星サマーワールドの貴族の公子だった。宝石といい、椅子といい、一門の領地からもってきたきわめて高価なもので、位相空間の美と恐怖のために凡俗の快楽を捨てていなかったら（あるいは、捨てようとしていなかったら）、自分のものとなっていたはずの富と栄光をしのばせるものだった。かれが親指と人差指で長い口髭をひねったとき、指輪のぶつかりあうカチッという音がした。

「なぜ、できないことをしたがるんだ？」かれは、ぼくにきいた。「むちゃだよ、まったく」

「叔父に会いたいんだ、そのどこがいけない？」ぼくは、黒いレース用のカメライカをはめながらいった。

「なぜ質問に質問で答えるんだ？」

「質問に質問で答えて、どこがいけない？」

バルドは長嘆し、目をくるりとまわした。「明日、かれに会えるじゃないか。それじゃ遅いともいうのかい？われわれは宣誓をする。その後、パイロット長官が指輪を授与してくれる——と思うんだが。われわれは、パイロットになるんだよ、マロリー。そうなりゃ、後はこっちの好きなようにできるんだ。今夜は、トララチェを吸うとか、女郎をふたりめつけて——めいめいがふたりずつという意

味だ——ひと晩中、血が乾くまでやりまくって過ごすのさ」

バルドは、また違った点でぼくよりはむちゃなことをするし、規則もやぶる。宣誓前夜にしなければならぬことは、座禅を組んで瞑想し、位相空間に入って、かつ生きのびるのに必要な精神の鍛練をすることだった。

「この第七十日に」ぼくはいった。「母は、ソリとジャスティンを夕食に招待したんだ。ところが、かれは、無作法にも招待に応じなかった。ぼくと顔を合わせたくないんじゃないかな」

「で、かれの無作法にもっとひどい無作法で応えようというわけか？　かれが友人たちと飲んで酔いつぶれたいと思っっているとしたら……。ま、ソリ長官がどんなに飲んべえか、知らない者はいないんだ。そっとしておいてやれよ、相棒」

ぼくは、スケートを引き寄せると、はいた。隙間風の吹きこむ窓の下にあまりにも長時間おいたままにしておいたので、靴が冷たく、堅くなっていた。「いっしょに来るかい？」

「いっしょに来るかい、だって？　いっしょに来るかい、だって？　なんていうことをきくんだ！」

バルドは、げっぶをし、揺れ動く太鼓腹をたたきながら

窓から表を覗いた。ぼくは、かれの潤んだ茶色の目に混乱と、ためらいの表情がちらとみえたと思った。

「もしバルドがいっしょに行かなければ、きみは、ひとりで行く。ひとりじゃいやだなんて、いわないでくれよ！」サマーワールドの貴族階級の多くの者がそうであるように、バルドは、ときたま自分のことを名前という気どった癖をもっていた。「で、それからどうなると思う？　きみになにか間違いがあれば、バルドの責任ということになるんだ」

ぼくは、スケート靴の紐をきつく結んだ。ぼくはいった。「できるなら、叔父と親しくなりたいたいと思っているんだよ。かれがどんな外見をしているのか知りたいんだ」

「かれがどんな外見であろうと、気にすることはないさ」
「いや、気になるな。わかってるくせに」

「いくらその気になったって、かれの息子にはなれないんだから。なんべんいったらわかるんだ。きみは、かれが〈虚無〉を発ってから四年後に生まれたんだぞ」

ぼくがバイロット長官と兄弟——あるいは、息子と間違えられるほどよく似ているというのは、よくいわれていた。ぼくは、中傷にずっと耐えてきたのだ。母がだいぶ前から偉大なソリと不倫の仲だという噂がささやかれていたのだ。ジャスティン叔母のためにソリに鼻であしらわれた母は――

「これも、口がない連中の嘘だ——ファースターズ・クォーターの通りという通りをさまよい歩いて、男を、息子の父親となるべき男をだ。私生児マロリーというわけだ。の父親となるべき男をだ。私生児マロリーというわけだ——ボージャの修練士たちは、そう陰口をたたいており、なかには、大胆不敵にもぼくに面と向かってずばりという者もいた。少なくとも、時間守護者がぼくに大昔のレスリングとボクシングを教えてくれるまではそうだった。

「それで、きみがかれに似ているとして、どうだというんだ？　かれの甥じゃないか」

「甥は甥でも、血のつながりはない」

ぼくは、著名ながら傲慢なパイロット長官に似ているのがいやだった。かれの染色体の特徴がぼくのそっくりらしいのが、とてもいやだった。かれの甥であるだけでも迷惑な話なのに、バルドにもわかっていたとおり、ソリがひそかに《虚無》へもどり、母を個人的な目的に利用していたのではと、大いに不安を掻きたてられた。あるいは……ほかの可能性については考えなくなかった。

「きみには好奇心というものがないのか？」　ぼくはきいた。

「パイロット長官がわれわれの《社会》の三千年間でも最長の航宙からもどってくる。だのに、きみは、かれがなにを発見したか知りたいとも思わないのか？」

「ああ、好奇心で悩んだりすることはない、ありがたいことにな」

「集会で時間守護者が探究のための遠征を命じるという噂だ。知りたいとは思わないのか？」

「もしもだ、遠征が行なわれれば」　バルドはいった。「われわれは、たぶん全員死ぬことになるだろう」

「旅^{ジャーニーマン}人は死す」　ぼくはいった。

「旅人は死す」——これは、われわれの格言、リーサの正門の上のアーチに刻まれてある警告で、若い修練士修了者たちが位相空間で生命を落とさないうちからびくびくして《社会》を発つよう意図されたものだ。まぎれもない真実そのものの格言だ。

「星間で死ぬことこそ」　ぼくは、タイチョウの言葉を引用した。「もつとも栄えある死である」

「馬鹿な！」　バルドは叫び、椅子の肘掛けをたたいた。げつぶをし、いった。「きみと知りあつて十二年になるが、いまだにたわいもないことをいっているんだな」

「永遠に生きられるわけではないさ」　ぼくはいった。

「ためしてみることはできる」

「そうなりや、地獄だろうよ」　ぼくはいった。「来る日も、来る日も同じことを、さえない同じ星々のことを考え、同じことをしたり同じことについて話したりする同じ友人た

ちの同じ顔。われわれの同じ頭の中にとらわれた仮借ない無感動、混乱し、苦痛に満ちた毎日を送る、このなんの張りもない永遠の生命」

バルドは、頭をげしく前後に振った。汗が額から飛び散る。「毎晩、違った女だ」かれは、反駁した。「それとも、毎晩、ぜんぜん違った女三人ずつだ。なにもかも退屈でしかたがなくなったら、いっそ男か、どこか異星の高級娼婦としゃれこむのもいいだろうさ。文明世界の三万の惑星。まだ、そのたった五十しか見ていないんだ。ああ、ぼくは、パイロット長官と、かれの探究の話を聞いているんだ。生命の秘密についてのな！ 生命の秘密を知りたくはないか？ バルドが生命の秘密について話して聞かせてやろうじゃないか。いろいろといったが、要は、時間の量ではない。長けりゃいいというもんじゃない。質の問題ですらない。変化だよ」

いつものとおり、バルドのしゃべりまくるにまかせた。かれは、憑かれたようにしゃべりまくった。

「ファースターズ・クォーターのバーの変化は無限と違っていい」ぼくはいった。「いっしょに行くかい？」

「待ってましただよ、マロリー！ もちろん、行くさ！」

ぼくは、レース用の手袋をはめ、スケートの刃を取りつけた。それから、われわれの部屋のごついマホガニーの下

アのほうへ歩いていった。スピード用のスケートの長い刃がいつぶう変わった織りかたのフラヴァシ絨毯にへこみを残した。バルドは、とんきような叫び声をあげて立ちあがると、ぼくの後を追ってきて、黒いスリッパをはいた足でへこみをならした。「きみには、美術工芸品を大事にするという気がまるでないんだから」スケート靴をはきながら、そういった。それから、黒いジャグシェイの毛皮のケーブを肩に羽織って金の鎖で留めると、ドアを開いた。「おい、教養のないやつ、行くぞ！」バルドはいった。われわれは、すべって通りへ出た。

われわれは、腰を落として背を丸め、腕を振ってリーサの「朝の塔」のあいだをスイスイとすべっていった。スケートの刃がなめらかな赤い氷にこすれて規則正しい軋み音をたてている。顔にあたる冷たい風が心地よかった。まもなく、高等職業養成学校アップリサの、花崗岩と玄武岩の建物を猛スピードで通りすぎ、アカデミーの西門の大理石の円柱のあいだを通り抜けた。そして、そこにそれはあった。

チラチラと輝いている。ぼくの「都市」。チラチラと輝いている。文明世界のすべての都市のなかでも最も美しい都市だといわれている。バルバレイクス、あるいはヴェスパの聖堂都市よりもなお美しいと。西側に、寶石を象嵌

した巨大なたもとのように切れこんでいるファースイダーズ・クォーターの、もろそうに見える黒曜石のアーケイドとホスピス群が黒いガラスの鏡のごとくきらめいている。

われわれが向かっているまっすぐ前方に、入江の泡立つ海面、ノース・ビーチの断崖に砕ける白い波頭が見え、そして頭上、〈都市〉全体に紫色の筋が縦横に走っており、雪と氷におおわれてキラキラ光っているワースケルとアッタケルが空を背景に巨大なピラミッドよろしく伸びあがっている。半円形に連なる死火山（ちよっ）といっておきたいのだが、ウルケルは、最南端の頂で、他とくらべて決して壮観というわけではないが、正円錐形をしており、目を楽しませる者もなかにはいる）のふもとに、アカデミーの塔や尖塔が林立しており、〈疑似冬〉のめくるめくような光を投げかけ、そのために旧都全体がきらめいている。だれもが知っていることだが、通りは、色つきの氷だ。白い微光を放つ〈都市〉全体がオレンジ、グリーン、ブルーの織り糸で断ち切られているようだ。『苦痛の都市の通り』は奇異だ」と、時間守護者は、好んで引用する。確かに色彩ゆたかで、奇異ではあるが、あくまでもある目的にかぎった色彩のゆたかさであり、奇異さだということだ。通り——グリセードとスリデリー——には名前がない。修練士が〈都市〉の各通りを記憶することで位相空間の道筋にそ

なえることができると、初代時間守護者が発表してからずっと無名のままになっているのだ。われわれの〈都市〉が大きくなり、変わっていくとわかってから、かれは、あまりにも長期間留守をしてもどってきたパイロットが氷のあいだを通っても道に迷わずにすむような、ある計画を考えた。ごく単純な計画だ。本通りを二本、設ける。その一本、〈ラン〉は、ブルーに彩られ、ウェスト・ビーチから始まって、長いたもとのような半島を横断し、アッタケルとウルケルのふもとにまで通じている。〈ヘウエイ〉は、ホロウ・フィールズから〈入江〉^{ザ・バッド}までまっすぐに続いている。オレンジ色のスリデリーは、いずれもそのまたどつていくと最後には〈ヘウエイ〉と交差する。グリーンのグリセードは、いずれも〈ラン〉と交差する。紫色に彩られたグリデリーは、グリセードと交差し、もっと小さな赤いグリデリーは、スリデリーに通じる。二本の黄色い通りがパイロット・クォーターを貫通して走っていることをのべて、この問題をあまりややこしくしたくはないのだが、そのとおりなのだ。どうして黄色い通りが二本もそこを走っているのか知る者はいない。初代時間守護者の冗談であることは、間違いないさそうだ。

われわれは、アカデミーの西はば一マイルほどのところの、オレンジ色と白が基盤目模様となった交差点でヘウエイ

インに出た。通りは、ハリジャンや密輸業者^{ワイルドランナー}、そのほかの
ファーサイダーで混雑していた。われわれは、われわれの
《社会》の終末論者や治療師^{セラピスト}、脳析師^{ブレイク}、測時者、職業専門
家、アカデミー会員に出会い、通りすぎざまお辞儀をした
(ほかにパイロットにはひとりも出くわさなかった。われ
われパイロット——これに異存のある者もいるだろうが——
は、われわれの《社会》の魂そのものでありながら、予
見師^{ライア}や全体論者、歴史家、備忘家、生態学者、さらにはプ
ログラマー、新語義研究家、集合論者などにくらべ、圧倒
的に少数派だった。われわれの《社会》には現在、百十八
の専門分野がある。それでなくともあまりにも多すぎる専
門分野がありながら、毎年、いくつかの分野が追加されて
いるようだ)。あたりに活気がみなぎっていると同時に、
ふたりの人類の友の異様な匂いもたちこめていた。かれら
は、たがいに話すときにはゾウの鼻のような長い器官をも
ちあげて、汚らしい言語分子を吐きだす。われわれのすぐ
そばを、高価な衣装をまとったひとりのアラロイ人——と
いうか、その肉体を厚みがあって、力強い、毛むくじらの
アラロイ人の肉体に整形した地球人がスケートですべっ
ていた。こうした、肉体を人工的に原始人の肉体にもどす
処置は、サマーワールドのあの有名なゴシエヴァンが地球
人の肉体に飽きて、《虚無》の西にある島の洞窟でアラロ

イ人たちと生活することになって以来、長年にわたって流
行になっていたのだった。紫のビロードと金色のめだつ服
装をした人工のアラロイ人は、ほっそりしたおとなしいハ
リジャンを突きとばして、道を空けさせると、叫んだ。

「気をつけろ、間抜けのファーサイダーめ!」とまどうハ
リジャンは、なにごとか口ごもるようにいい、てかてか光
る額に和平の合図を切ると、負け犬よろしくすぐごと人
込みにまぎれこんだ。

バルドは、ぼくを見やり、しょんぼりとかぶりを振った。
かれは不思議と、ハリジャンや、感化されようとわれわれ
の《都市》へやってくる宿なしの巡礼たちにもいつも同情し
ていた(この巡礼たちだが、感化されたいという思いも確
かにもってはいたが、なかにはもつと俗っぽく、富を求め
てやってくる者も大勢いた)。バルドは、残酷なアラロイ
人のほうへ近寄りながら、にっこり笑った。そして、なに
も疑っていない男の、紫色の衣服でおわれた脚のあいだに
木の幹のような太い脚をなげなくもっていった。鋼鉄と
鋼鉄のぶつかる音、鋼鉄の水をけずる音がして、とつぜん
男は、どつと前のめりに倒れた。ポキッという音がした。
バルドは、叫んだ。「これは失礼!」それから、声をあげ
て笑い、後ろへ手を伸ばしてぼくの腕をつかんで引つ張る
と、ひしめきあうようにしてすべり、夕食をとるため思い